

---

# 長雨と約束

結城菜緒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

長雨と約束

### 【Nコード】

N0589B

### 【作者名】

結城菜緒

### 【あらすじ】

「また明日、公園で遊ぼうね」と約束した鈴と茜ちゃん。でも、長雨のせいで『明日』が来ない。明日は来てるのに『明日』来ない。『明日』っていつ来るのかな？

**（前書き）**

わかりにくいかもしれませんが、少しでも何かを感じてもらえたら嬉しいです。

「また明日も公園で遊ぼうね。約束だよ」  
そう言つて、茜ちゃんと指切りをした。

「いつまでそうやってガラスにくっついてるつもり？きっと今の鈴の顔すごくブサイクよ」

「だつてえ」

「だつてえ、じゃないの。はやくこっち来なさい。ご飯冷めちゃうわよ」

鈴は窓ガラスから離れ、手招きをする母親を少しにらみ、しぶしぶ食卓テーブルに近寄つた。鈴は背伸びをしながら、テーブルの端に手を起き、しがみつきながら言つた。

「またチャーン？」

その姿を見ながら、母親は鈴に近寄り、鈴の着ている桃色のワンピースを触りながら言つた。

「あんなことしてるから、ガラスの水滴で服が湿ってるじゃない」

「いいの。ガラスのお水だからきれいだもん」

母親はやれやれと言つように肩をすくめた。

「ほら、はやく座つて食べなさい」

「だつてえ」

「だつてえ、じゃないの。また明日でいいじゃない」

「また明日、また明日つて、明日はいつ来るの。今日はいつだつて今日なのに。明日だつて1日しかないはずでしょ？」

「それは…」

ブルルルッ

リビングの電話が鳴つた。

「茜ちゃんかな！」

そう言つて鈴はドタドタ音をたてて、ガチャツと勢いよく受話器

を取った。

「茜ちゃん？」

「鈴ちゃん？おはよう。今日も雨降りだね。また遊べないのかな。もう約束の日から六日もたってる。さんねんだね」

「だよ。鈴も朝からそのことばかり考えてた」「ねえ、茜ちゃん。約束、覚えてる？」

「うん。また明日、公園で遊ぼうね、でしょ？」

「うん！でも、明日は来てるのに約束は果たせないの。どうしてかな」

「約束は延ばせても、明日は延ばせないしとばせないからじゃないかな」

「でもお母さんは、また明日って先に延ばすことが出来るみたいに言ってるよ」

「…うーん」

鈴と茜ちゃんの間には沈黙が流れた

「…どうしてだろう」

二人とも同時にそう呟いたが、お互いに自分の声しか聞こえなかった。

でもきつと、そのおかげ。

「茜ちゃん。天気のお神様と約束すればよかったね」

「え？」

「明日、鈴と茜ちゃんが遊ぶから、太陽さんでぴっかぴかにしてね。約束だよって」

「ふふ、そうだね」

あはははは、と二人で笑いあった。

「ねえ茜ちゃん、また明日、とか忘れてさ、今から遊ぼうよ」

「え？でも雨降りだよ」

「レインコートと傘、あと長靴をはいて」

「大丈夫かな…お母さんに聞いてみるから、少し待っていてね」

鈴がうんと返事をする。茜ちゃんが茜ちゃんの母親の所へと駆け

るトタトタという音が、電話越しに鈴の耳に流れてきた。それを確認して、母親に言った。

「レインコートと傘と長靴どこにあったかな」

「すみませんね。こんな雨の日に」

「うん、こちらこそごめんね。それに言い出したのはきっとウチの鈴だと思うし」

鈴と茜ちゃんの母親がそんな話をしても、そんなこと関係ないように鈴と茜ちゃんは話していた。

「あ、茜ちゃんのその長靴可愛いね」

鈴は茜ちゃんの黄色い長靴を指差して言った。

「本当？ありがとう。でも鈴ちゃんの赤い長靴もすごく可愛い」

茜ちゃんに可愛いと言ってもらえた赤い長靴がなんだかとても誇らしくなったのか、鈴はその場でパシャパシャと足踏みをして、水しぶきを少し上げ、ブルブルと体を震わせた。

「ふうーう。さっ、はやく公園に行こ！」

「うん、そうしよう。じゃあ、お母さん、鈴ちゃんのお母さん、鈴ちゃんと公園に行ってきます。暗くなる前に帰りますね」

茜ちゃんは礼儀正しく自分の母親と鈴の母親に言いながらお辞儀をした。その姿を見て鈴もペコリと頭を下げた。

「鈴ちゃん、行こう」

茜ちゃんが傘を持った左手とは反対の手を差し出して言った。

「うん！」

鈴もとびきりの笑顔で応え、差し出された茜ちゃんの手を握った。「行ってくるーす」

二人で声を合わせてそう言うと、公園へと続く道をピチャピチャパシャパシャ音をたてて、仲良く歩いていった。

示し合わせたかのように、長靴と同じ色の傘を持ち、透明のレインコートの下から薄く見える桃色のワンピースと黄色の洋服。雨の

なかを笑い合いながら歩くその二人が心なしか輝いて見えるかのように、母親である二人の大人は口をそろえてこう言った。

「子供は、いいわね」

お互いは顔を見合わせて、少し笑った。どちらから言うわけでもなく、でもきつと昔の自分たちを思い出したのだろう。

そして、子供だからではなく、大人だからでもなく、私が、私たちが変わってしまったのだと。

「さ、じゃあ私たちも動きだすしますか」

鈴の母親はふっきれたかのように言った。

「ふふふ、そうですね」

茜ちゃんの母親も優しい笑顔を添えた。

「やっぱりさっきのウソ！神様とじゃなくて茜ちゃんと約束してよかった」

「どうして？」

「だって、茜ちゃんとだからこうして約束守れたもん」

鈴は屈託のない笑顔を茜ちゃんに向けた。

「私とだから？」

茜ちゃんは不思議そうに語尾にアクセントをつけた。

「うん！だって、相手がいるから約束が出来たんだよね。それに」

「それに？」

「明日は何回でも来るけど、昨日の明日は今日だけだもん！」

相変わらず雨は降り続けるけれど、たかがそれだけ。カレンダーは止まっているけど、時計は止まっていない。時計は止まってないけれど、時間を繰り返しているだけ。たかがそれだけ。

じゃあ、あなたは？





（後書き）

どうでしたか？

はじめて投稿させてもらったのですが、感想など何でもいいので聞かせてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0589b/>

---

長雨と約束

2010年10月8日15時47分発行